

駒澤大学考古学研究会・研究室刊行の 『先史』と『駒澤考古』

酒井清治

駒澤大学⁽¹⁾の考古学は、倉田芳郎先生が1965年4月に文学部地理歴史学科の非常勤講師として講義をもたれたことに始まり、2025年に60周年を迎える。飯島武次先生(研究会1期生)が4年生の時、秋山和広・軽部一一・國平健三・杉田浩氏(同4期生)らが入学し、考古学を勉強したいと倉田先生に要望し駒澤大学考古学研究会がつくられた。翌年の1966年に北海道岩見沢の駒澤大学北海道教養部から3年生の西幸隆・平川善祥氏ら同級生5人(同3期生)が本校に移られた。1967年地理と分かれて新たに文学部歴史学科となり、倉田先生は専任講師として就任され倉田研究室が考古学研究室となった(『駒澤考古』40号 序)。研究会草創期のことは『やあ 君たち奇遇ですなあー倉田芳郎先生思い出文集一』(2022)の國平・杉田両氏の文章にも詳しい。

一方、北海道教養部では本校とほぼ同時期に歴史研究会がつくられ、1965年に機関誌『先史』が発刊された。3号まで発行されたが、1号は北海道先史文化の概要、2号は東釧路貝塚発掘参加結果報告、3号も東釧路貝塚発掘参加と岩内町全修寺遺跡出土遺物であった(西幸隆氏ご教示)。先述したように教養部から5人が本校に移られたため、教養部の活動が事実上空白となってしまった⁽²⁾。そこで、それまで雑誌を刊行していなかった本校に『先史』を移し、駒澤大学考古学研究会の機関誌として毎年出すようにしたようで、1968年には『先史』4号が印刷物として刊行された(『先史』4号編集後記)。

1967年に考古学研究室ができ、倉田先生の指導のもと研究室と研究会が両輪の輪のごとく活動をしていく。そのことは、1972年『先史』8号の編集後記に、「駒澤大学考古学研究会は、駒澤大学考古学研究室と改名され、『先史』はその機関誌として引き継がれた。原則として年1回刊行の論文集であるが、単独の発掘調査報告書も概ね『先史』の名のもとに刊行される」と記されていることから分かる。本来研究室と学生の研究会は別であるが、当時の研究会生の意識は一緒であった。

倉田先生は、報告書について「永く残る報告書は、できるかぎり客観的事実を忠実に記録した報告書である」という、「元来もっている観点にたって」作られていたようである(『長野・大室古墳群』1981おわりに)。先生は、学生たちが独り立ちできるよう測量・写真・実測の技術を教え、発掘方法から指導し作成された報告書を、学生個々の記名と共に倉田芳郎編集として責任を持ち、考古学研究室の名で広く行き渡るようにと数多くの部数を印刷し、学生の実績にしようと考えられていたようである。

そのため、1971年『栃木日産遺跡』(先史7)、『千葉・南総中学遺跡』(先史10)、『東京・上之台遺跡』(先史11)、『長野・大室古墳群』(先史13)、『千葉・上ノ台遺跡』(先史14)、『長崎・松浦皿山窯址』(先史15)、『東京都町田市武蔵丘遺跡』(先史16~19)、『東京・石川天野遺跡』(先史20~25)、1987年『太陽の丘遺跡』(先史26)など、多くの報告書が『先史』として刊行されたが、雑誌として出されることもなく1987年で休刊していた(駒澤大学考古学研究室HP 研究室の刊行物)

一方、駒澤大学考古学研究会発足後、1968年1月「連絡紙として又研究発表の場として」考古学研究会会報である『駒澤考古』を発刊し、1968年3月に第2号、1970年6月に第3号をタイプ印刷で出し、

採集遺物、遺跡紹介、研究発表などが掲載された(5期生古泉弘氏ご教示)。また、活動報告には発掘調査だけではなく、年6回ほどの講演会を開き、重松和雄・江坂輝彌・藤本強・甘粕健・加藤普平・佐藤達夫先生等の名が見える。倉田先生は学生のためにその後も年1回の招待講座を続けられた(考古学研究室HP資料ダウンロード 平成9年『倉田芳郎先生古稀記念祝賀会』)。

『駒沢考古』はその後、ガリ刷りで発行していたが、発掘や報告書作成などに追われ不定期発行であった。1975年から本格的に始まった千葉市上ノ台遺跡は駒沢大学第2研究室の様相もあり、1974年6月から『駒沢考古』12号を『駒沢考古 上ノ台版』1号として12号まで発行し、上ノ台版1号には倉田先生の「上ノ台遺跡第Ⅱ次調査方針」が掲載された。『駒沢考古』の発行は、先述した『先史』8号編集後記に記されているように考古学研究室と改められたが、内容は研究会活動が主であり、研究会発行とすべきであった。『駒沢考古』最終号は1985年の53号で、國見徹氏の熊谷市入川遺跡概報のようである(21期生國見徹氏ご教示)。『駒沢考古』ガリ刷りであったためか保存されていないことは残念である。

筆者は1997年に駒澤大学へ赴任したが、2001年に日本考古学協会第67回総会を開催するにあたり、卒業生の中から研究成果を発表できる雑誌を刊行したいとの話が出た。長らく駒沢大学考古学研究室の『先史』は報告書に使われて、1987年以降出されていなかったのもう一度雑誌と報告書を分けて別に出すことを考え、『先史』は先史時代だけを扱うわけではないことから、誌名も変えたいと思った。倉田先生に相談したところ、最初に北海道教養部で使われた誌名であることから西さんにも話をするようにと言われた。西さんからは、北海道教養部における『先史』刊行のいきさつについて丁寧にお話を伺うことができ、誌名変更の承諾もいただいた。誌名は、大学の名称が分かるのが良いと考え、研究会連絡紙であった『駒澤考古』の名称を採用し、『先史』の号数を継承して、編集は考古学研究会、発行は考古学研究室とした。

その時期は、2000年夏に発掘した秋田市手形山南遺跡の報告書作成、『駒澤考古』刊行と重なったが、37期生が中心となり表紙のデザインも含め作業を進めてくれて、駒澤大学で開催の日本考古学協会第67回総会に合わせて2001年5月『駒澤考古』第27号として復刊することができた(「駒澤考古復刊の頃の研究会活動」『駒澤考古』40号)。その内容は、倉田先生の退職講演録「日本磁器の祖・李参平」、37期生の「世田谷区西谷戸横穴墓群の研究ノート」などを掲載できた。

私は、『駒澤考古』27号の編集後記に、『先史』が創刊された教養部はすでになく、『先史』を返す場所はないが、創刊から続けられた『先史』に対する思いは、今後も『駒澤考古』に引き継がれていくことをここに記しておく」と、書いた。教養部歴史研究会、考古学研究会、考古学研究室、倉田先生の『先史』は、現在も『駒澤考古』として引き継がれている。

註

- (1) 『駒澤考古』の澤・沢は、かつては大学で決まっていなかったが、2000年前後から「澤」に統一された。刊行当時の名称のままに記述した。
- (2) 北海道教養部ではその後、河野本道先生が講義を担当することになった1970年、2年生によって考古学研究会がつくられた(『駒沢大学北海道教養部考古学研究会紀要』序 1981)。その2人が考古学を専攻し、3年生として本校研究会の私と同期の8期生(大谷・小林氏)となった。その後も教養部考古学研究会から本校研究会に多くの学生が加わっている。なお、教養部は1999年3月に閉校した。